

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**プロジェクト研究（単独研究科プロジェクト研究）**  
**2003年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 文学 研究科	
<b>研究課題</b>	生活世界から捉えるグローバル／ローカル化の動態に関する地域間比較研究	
<b>研究代表者</b>	所属・職名	氏名
	文学部・教授	豊田 由貴夫 印
<b>研究組織</b>	所属大学名等・職名	氏名
	立教大学・文学研究科・教授 立教大学・文学研究科・教授 立教大学・文学研究科・教授 立教大学・文学研究科・助教授 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程 同博士後期課程	小西 正捷 栗田 和明 上田 信 飯島みどり 市川 哲 岩田 晋典 大塚 直樹 関根 光宏 白坂 直子 佐藤 誠 八幡 綾 山本早良紗
<b>研究期間</b>	2003 年度	
<b>研究経費</b>	6,734 千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、非欧米地域におけるグローバル化／ローカル化の相互作用をミクロな状況から捉え、グローバル化に関する研究に対して提言を行うことを目的とした。グローバル化のプロセスによって「ローカルな日常」が一方的に変化するという立場ではなく、グローバル化と、その対応現象たるローカル化は「日常」の中でむしろ相互作用をとっていると考えることにより、新しい視点からの分析を目指した。このために、以下の3つの姿勢にもとづき、グローバル化／ローカル化の問題を考察した。

① グローバル化とローカル化を分析概念としてではなく、分析対象として捉える  
 ② ローカル＝日常とは限らない、という出発点を持つ  
 ③ 非欧米地域からの視点を持つ

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[グローバル化] [ローカル化] [地域研究]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は非欧米地域で観察されるグローバル化とローカル化の相互作用を、フィールドワークに基づく実証的研究と、グローバル化とローカル化に関連した議論に基づく理論的分析の両方の側面から捉えることを目的とした。これはいわば、グローバル化とその対応現象たるローカル化が「日常」の中でどのように作用しているのかという問題設定と言い換えることが出来る。本研究プロジェクトが行ったのは、グローバル化とローカル化を相互に対立した概念として捉えるのではなく、両者の相互作用の動態を、フィールドワークで具体的に観察される、日常的な生活の中で捉える必要性の提唱である。

以下、本研究の特長について述べる。

第一点目は、個別地域から出発し、地域間の比較を通して、超地域的視点に依拠した議論を行った点である。グローバル化に関する研究においては、グローバル化が暗黙のうちに「普遍」と見なされがちであり、その偏向を避けるためには個別・特殊から出発しようとした。それにより、近年の人文社会科学の諸分野でしばしば言及されるグローバル化研究に対し、特定の地域に立脚した議論を行うことが可能であると考えた。

第二点目は、グローバル化と分かちがたく結びついている欧米社会が持つバイアスを、非欧米地域に関する研究から明らかにし、より価値中立的な視点を模索した点である。グローバル化が地球規模における欧米支配体制の展開であることは一般に認識されている。そのためグローバル化の核心を見抜くには、その支配が及んでいる非欧米地域に焦点を置くことが有効であると考え、複数の非欧米地域から「グローバル化」の諸相を明らかにした。

第三点目は、現地調査の重要性を再確認し、ミクロな視点からマクロな議論を展開する可能性を示唆したことである。本研究の参加者たちは既に個別の地域で研究の蓄積があり、現地を総合的に理解する訓練を受けている。今回のテーマについても各地域の総合的な理解の背景があり、これをもとにして研究を進めることができた。ローカルな研究から一般化を進めるために、長期の緻密な現地調査が有効なものであることを前提として研究を進めた。

本研究プロジェクトに参加した研究分担者はこうした目的意識に基づき、2003年から2004年にかけて、非欧米地域を対象としたフィールドワーク、および日本での理論的研究を行ってきた。具体的、個別的な研究内容は後述することとして、全体での成果は以下のようなになる。

まず本研究で明らかになったのは、グローバル化とローカル化の相互作用の確認である。事前に予想したとおり、グローバル化は一方的に進行するわけではなく、そこにはローカルな主体からの反発、選択、習合などが起こり、ダイナミックな相互作用が観察された。そしてその相互作用には地域的な変異が大きいことも確認された。きわめて強い反発が観察される場合もあり、一方でグローバルな要素の積極的な取り込みも観察された。

以上のような理解から、研究の過程で以下のような問題提起が行われた。まず、各地域間の差異が大きいことから、それら相互作用のタイポロジーを研究することの必要性の示唆、また「グローバル化」に対抗する「ローカル化」概念の精緻化(例えば「反グローバル化」などの概念とのすりあわせ)の必要性の指摘などである。これは今後の理論面での課題といえる。

## 研究成果の概要 つづき

以下は、本研究で行った具体的な活動である。

第一は、定期的な研究会の開催により行った、各研究分担者による問題点の抽出と問題意識の共有である。非欧米地域を研究対象に設定し、各研究分担者がそれぞれの関心にもとづき、各地域で現在生起しているグローバル化に関する先行研究から問題点をクローズアップさせ、さらにプロジェクト参加者相互の問題意識の共有を図った。

第二はやはり研究会開催により行った、理論的枠組みの検討と各調査の報告である。各研究分担者はフィールドワークを行う前に、さらにはフィールドワークで得た調査結果について相互に報告を行ない、それぞれの文脈におけるグローバル化／ローカル化の様態、類型、そして機能について議論した。

第三は、現地調査の実施である。これまで研究の蓄積がある各研究分担者が今回のテーマに関してそれぞれの問題関心にもとづき長期間の現地調査を行った。調査期間は数週間から数ヶ月にわたるものもあった。

以下は、今回の研究成果報告書としての論文集（印刷中）に掲載予定の論文タイトルである。

- 豊田由貴夫「芸術による国家表象について — パプアニューギニアの場合 —」  
 小西正捷「Khadi Village Industries Commission and the Present State of Handmade Paper Production in India」  
 栗田和明「ソングウェ川をはさんだ交易 — 国境地域での商活動 —」  
 岩田晋典「能動的な自己を示すために  
 — スリナム社会の黒人女性と多文化主義 —」  
 大塚直樹「メコンデルタにおける種子生産組織の出現とその役割 — アンザン省の稲種子生産の事例 —」  
 関根光宏「南アジア、ベンガル地域における素焼きの流通と消費について」  
 白坂直子「形成あるいは創出される観光地と地域住民とのかかわり — インドネシア・ロンボク島の事例から —」  
 佐藤誠「現代における工芸概念の再考 — インド、オリッサにおける織物『サンバルプリ』を事例として —」  
 八幡綾「『近代化』の進展と『伝統』を継承するということ — 西インド・ラージヤスターン地方の門前町ナートドローラーの絵師集団の事例より —」  
 山本早良紗「インドネシア・バリ島におけるケガレ観念について、そのグローバル化／ローカル化の動態に関する考察 — 爆弾テロ事件をめぐって —」

今回の研究プロジェクトを発展させる今後の研究としては、2つの方向性を予定している。1つは、今回の研究関心を特定の地域に絞って研究を進めることである。研究代表者の豊田は、地域をパプアニューギニアに絞り、他大学の研究者との共同研究という形で学術振興会の科学研究費補助金に申請し（パプアニューギニア周縁部におけるローカルな「開発」思想と実践）、3年間の採択を受けた。もう1つは、問題関心を特定化し、他分野の研究者との協力により学際的な研究を進めることであり、これは共同研究の可能性をさぐるという形で既に活動を始めている。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 豊田由貴夫「パプアニューギニア、セピック地域における多品種栽培の論理」吉田集而・掘田満・印東道子編『イモとヒト：人類の生存を支えた根栽農耕』平凡社、2003、95-111頁。  
 栗田和明「タンザニア国内外でのニャキュウサ人の移動 — ライフヒストリーの調査から—」田中二郎、佐藤俊、菅原和孝、太田至共編『遊動民 — アフリカの原野に生きる —』593-629頁、昭和堂、2004。

上田信「封禁・開採・弛禁：清代中期江西における山地開発」(『東洋史研究』61-4、2003年、115-144頁)

市川哲「家族の戦略としての移住と世代間に見るその連続と差異 — パプアニューギニアの華人社会を事例として —」『南方文化』、2003年11月、第30号、45-66頁。

ICHIKAWA Tetsu “The Chinese Experience during the Japanese Occupation in New Guinea.” *People and Culture in Oceania*. 2004年度発行予定、20。

白坂直子「スハルト政権期の観光開発 — 五ヵ年開発計画の分析を中心に」『史苑』(立教大学史学会) 64(2)、2004、64-85頁。

八幡綾「西インド門前町ナートドワラーの絵師集団：慣習的交換関係の変容」『史苑』(立教大学史学会) 64(1)、2003、25-54頁。

山本早良紗「スチとスブル — バリ島におけるケガレの実態的考察」『史苑』(立教大学史学会) 64(2)、2004、86-110頁。

- ② 栗田和明『マラウイを知るための45章』明石書店、2004、295頁。

④ 〈学会発表〉

豊田由貴夫「パプアニューギニアにおける開発的介入とその現地社会への影響」日本オセアニア学会第21回研究大会、2004年3月22日、佐賀県嬉野温泉

TOYODA Yukio, ‘Art and National Identity: A Case of Papua New Guinea’, International Symposium “Expanding the History of Globalization”, Rikkyo University, 14th March 2004.

ICHIKAWA Tetsu, ‘Sojourning as Strategic Practice of Ethnic Chinese in Papua New Guinea’, at International Symposium “Expanding the History of Globalization”, Rikkyo University, 14th March 2004.

SATO Makoto, “The Situation and Problem in Studies of Crafts in Contemporary Orissa, India”, Orissa History Congress, 2<sup>nd</sup> November 2003, Sambalpur University, Orissa, India.

SATO Makoto, “Reconsidering the Concept of ‘Craft’ in Contemporary Context: a Case Study of Textile ‘Sambalpur’ in Orissa, India”, The Second Biennial Conference of Indian Association for Asian and Pacific Studies, 30<sup>th</sup> January 2004, Sambalpur University, Orissa, India.

〈研究報告書〉

OTSUKA Naoki, *Bao cao nghien cuu*, Truong Dai hoc An Giang, Long Xuyen: thang 2 nam 2004 (Research Report submitted to An Giang University).

〈博士論文〉

岩田晋典「スリナム共和国都市部における『アフロ・スリナム人』とその他の黒人エスニシティ」(立教大学大学院文学研究科博士論文、2004年)

市川哲「パプアニューギニアをめぐる華人の国際移動とエスニシティの文化人類学的研究」(立教大学大学院文学研究科博士論文、2004年3月提出。現在審査中)